相模経済新聞　2017 年 8 月 10 日号

そして、地球環境核戦争が始まった

北里環境科学センター
理事長／宇宙生命学者　伊藤　俊洋

5

ピラミッド型学問大系と宗教

人類は、脳機能を最大限働かせて、様々な工夫を重ね、より豊かな生活環境を築いてきた。その過程で、情報交換の術を得て、言葉を発明し、口頭伝承の社会を創造した。人類は、更に、言葉を文字として表現し、それを記録として残す技術を発明した。一旦知識が蓄積され始めると、蓄積された知識に命が吹き込まれ、大きな情報の流れになって、強大な力を得ることとなった。この情報が記録として残り始めた時期を、文明の誕生と考えて良いだろう。およそ1万年前のことである。

この知識の蓄積は、その当時の人達が等しく共有するものではなく、限られた人達によって占有されていた。優れた指導者達の中で、多くの不安や恐れを抱える万民の心の平安を願い、人々の心を1つにする方策を追い求めた人がいた。宗教という概念の創出である。宗教は、人の心の中に生まれた生命現象の1つで、人間が、包容力を育み、他者を受け入れ、安寧の心境で人生を送るための生活の知恵の1つと考えることができる。その信仰を楯に、他のグループを襲ったり、殺傷したりするのは、本来の姿ではない。

心の問題は、目が眩む程複雑であるが、私は、あえて、それを単純化し、自然現象として受け入れたい。

現代文明の根幹にある政治、経済、芸術、宗教、といった極めて精神的な活動も、近代原子論的に考察すると、総て、物理現象にまで遡ることができる。神も、仏も、天国も、地獄も、それらは総て人間の心の中に宿るものである。その現象は、電子雲の中の化学反応として捉えることができる。

近代原子論を詳細に理解しようとすると、量子力学などの高度な理論の世界がバリアーとして立ちはだかるが、そこでたじろぐことは無い。その理論を、更に高見から眺めて、理論の骨格だけを足下に踏み固め、自己の哲学を確たるものとすることだ。原子論を基礎にして物事を考えると、自然界の真相が極めて明快に見えて来る筈だ。地球上の自然現象の全貌を、宇宙から眺める習慣が身に付くと、更に物事の本質が見えてくる。極限状態に身を置かれた時、不必要な心配や、悩みを抱えることなく、仕事を楽しみながら限られた人生の時を有意義に過ごせる筈である。政治、経済、教育、宗教のリーダー達には、是非この自然現象の統一的見方を身に付けて欲しい。

しかし、地球上で原子核の破壊が進むと、世界は根底から破滅へと向かうことになる。

人類史上最高の芸術作品
日本の国宝第一号の
宝冠弥勒